

4 管内一養豚場における後継者への経営移譲に向けた収益力向上の取組

川越家畜保健衛生所
○増田 杏菜・中島 敏行

I はじめに

畜産経営者の高齢化、担い手不足が進む中、後継者への円滑な経営移譲を行うためには、承継意欲が高まるような収益力を持った魅力ある農場づくりが重要である。

今回、管内一養豚場において、豚舎の増築を契機とした衛生対策の強化に取り組み、収益力向上が図られたので、その概要を報告する。

II 取組概要

1 農場詳細および経営戦略

当該養豚場は、県南西部で昭和 45 年から繁殖経営を開始し、平成 10 年からは、肥育経営も開始している。農場主と後継者 1 名で管理しており、第 1 農場で繁殖、第 2 農場で肥育を行っている。現在の飼養頭数は 850 頭、うち繁殖豚は 120 頭であり、子豚出荷を 1200 頭、ブランド豚肉として肉豚を 1300 頭出荷している。

農場主は、今後の経営戦略として、子豚出荷を減らし、肉豚出荷を増やす肥育経営拡大及び環境問題に対応するため民家に囲まれた第 1 農場を農地に囲まれた第 2 農場への移転を考えていた。平成 28 年は、その第 1 段階として、第 2 農場へ子豚舎 1 棟と肥育豚舎 1 棟の増築を計画していた(図 1)。そこで、この増築にあわせ、更なる収益力向上を図るため、衛生対策強化による飼養環境向上を提案し、農場主及び後継者とともに取り組んだ。



図 1 農場主の経営戦略

2 衛生対策第一段階

衛生対策の第 1 段階として、平成 27 年 8 月から、HACCP の考え方を取り入れた「彩の国畜産物生産ガイドライン」に沿った衛生管理マニュアルを整備し、作業手順のルール化など、マニュアルに沿った管理を実践してもらった。農場主と後継者は、マニュアルに従った管理を忠実に実践していたため、平成 28 年 3 月、「埼玉県優良生産管理農場」に認証された(図 2)。

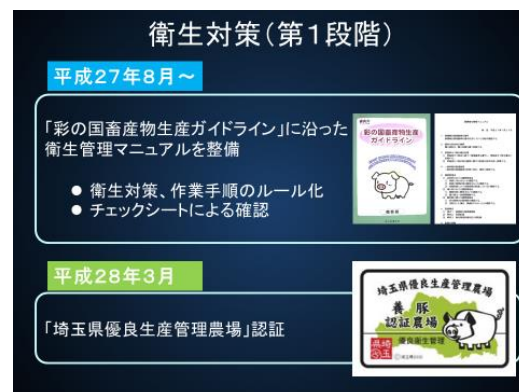


図 2 衛生対策第一段階

3 衛生対策第2段階

基本的な衛生管理体制が構築されたため、平成28年4月から衛生対策の第2段階に進んだ。当該農場では、PRRSが原因とみられる発育不良豚が散発していたため、管理獣医師も交え話し合いを行い、清浄化の取組みを開始した。

まず、農場内のウイルスの動きを確認するために、繁殖豚全頭検査および肥育豚舎と子豚舎の抽出検査を実施した。抗体検査陽性は、繁殖豚で77%、子豚舎は確認されず、肥育豚舎で90%であった。遺伝子検査は、繁殖豚、子豚舎では検出されず、肥育豚舎で67%であった。この結果から、繁殖豚では、かつて感染が起こっていたものの現在ウイルスを排泄する豚はおらず、子豚舎は清浄性が保たれており、肥育豚舎でウイルス感染が繰り返しているということが分かった。

そこで、肥育豚舎3棟を一斉に使い始めるのではなく、増築した肥育豚舎1棟を活用して、既存の肥育豚舎2棟の豚を順次オールアウトすることで清浄化する方法を提案した。

清浄化は、①清浄エリアと汚染エリアの区分管理、②清浄エリアの汚染防止のための衛生対策強化、③オールアウト後の豚舎洗浄・消毒・乾燥の徹底、空舎期間確保、④抗体検査によるモニタリングの4つの方策で進めた。

①清浄エリアと汚染エリアの区分管理では、清浄エリアと汚染エリアをロープや石灰帯により区分し、清浄エリアは後継者、汚染エリアは農場主が管理とした。②清浄エリアの汚染防止のための衛生対策強化では、農場境界に新設した出荷台を活用することで、出荷車両が農場内に入ることを禁止にした。また、これまで各豚舎に踏み込み消毒槽を設置し、長靴を消毒していたが、さらに豚舎ごとに長靴を設置した(図3)。③豚舎洗浄・消毒・乾燥の徹底では、新子豚舎・新肥育豚舎に、消毒、水洗、乾燥後、豚を導入した。既存の肉豚舎は、オールアウト後、石灰乳塗布まで行ってから豚を再導入した。空舎期間は洗浄後2週間以上とした(図4)。

なお、清浄エリアと汚染エリアの区分管理をより明確化するため、水洗作業は農場主が、清浄・汚染のグレーゾーンの消毒作業は、家保職員の演習を兼ねて家畜保健衛生所が、豚を導入する作業から後継者が行うこととした。汚染エリアの縮小、清浄エリアの拡大が進むにつれ、後継者の作業分担量が増え、後継者中心の管理体制への移行も併せて進めた。

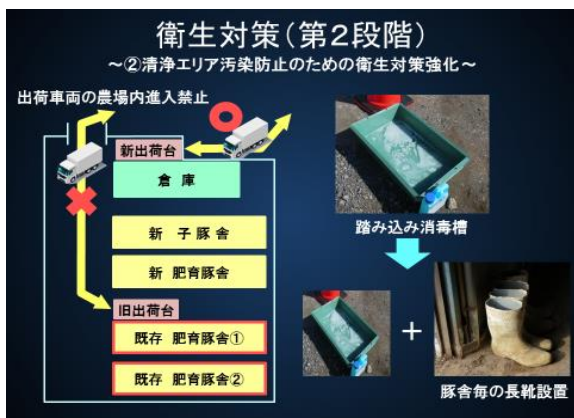


図3 衛生対策強化

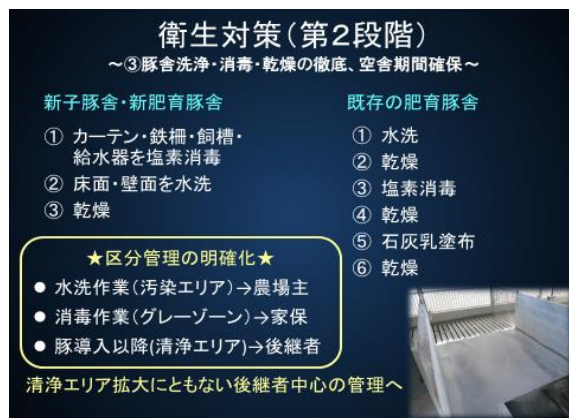


図4 豚舎管理

④抗体検査によるモニタリングは、9 月から毎月実施し、全ての豚舎で全頭陰性であった(図6)。

これにより、肥育豚舎の清浄化は達成され、あわせて後継者中心の管理への移行も進んだ。後継者からは、現在、肥育豚舎での肥育日数は7~10日短縮、事故率も3%から1%になったと報告があった。

清浄化後の衛生対策第3段階では、外部から病原体が侵入するリスクが最も高い肉豚出荷時の新たな衛生管理マニュアルを設置するとともに、豚舎内の衛生状態を維持するため、豚房が空になった場合の洗浄・消毒マニュアルを加え、日々の管理を行っている。



図5 作業工程



図6 モニタリング検査結果

4 収益性向上効果の試算

後継者の報告から、収益性向上効果を試算した。肥育豚舎増築により、肥育豚の飼養頭数および年間肉豚販売数が増頭、飼料代を差し引き565万円の収益増加となった。さらに、衛生対策により、肥育日数が10日間短縮し、回転がよくなり、事故率も低減したため、年間肉豚販売数が増頭し、358万円の収益増加となった。肥育豚舎増築に加えて衛生対策を強化することで、豚舎増築効果を565万円から923万円へと63%向上させる結果となった(図7)。

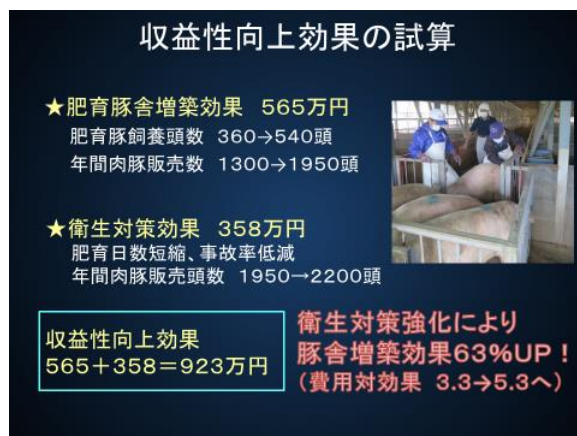


図7 収益性向上効果の試算

III まとめ

取組成功のポイントをまとめた(図8)。PRRS 清浄化では、ウイルスを清浄エリアに絶対に侵入させないことが重要である。清浄化に当たっては、豚の移動状況によってどのような管理をするかマニュアル化した。さらに、農家から、豚の移動や出荷を逐一報告してもらい、農家と家保で作業動線や次の豚の移動、豚舎カーテンの開け閉めなど詳細に作業内容を確認し、それに従い農家は作業を行った。そうした細かな確認を繰り返すことで清浄化は達成された。

しかし、きめ細かな指導をしても農家が報告を怠れば、取組は成功しない。今回は、衛生対策の第1段階を通じて農家の飼養管理及び衛生管理のやり方や考え方を理解し、衛生意識の向上を図ってから、清浄化に取り組んだ。農場、農家の状況や特性を見極め、農家が確実に実施できる手法・工程で進めたことも成功のポイントである。

最後に、農場主、後継者から信頼される指導の実施である。家保の衛生指導は、農家から衛生

対策自体が目的と受け止められがちである。しかし、衛生対策は収益力向上という目的のための手段であるという考えのもと、経営と調和のとれた衛生指導が重要である。また、今回、農家や管理獣医師との打合せには後継者も必ず同席してもらった。農場主よりも後継者に視点を置いて指導したことも後継者の経営意欲向上や信頼獲得につながったのだと考えられる。

管内の畜産経営をみると、課題も農場によって様々である。今後も、家畜保健衛生所の知見をフル活用してそれぞれの農場に応じた収益力向上の取組を支援していきたい。

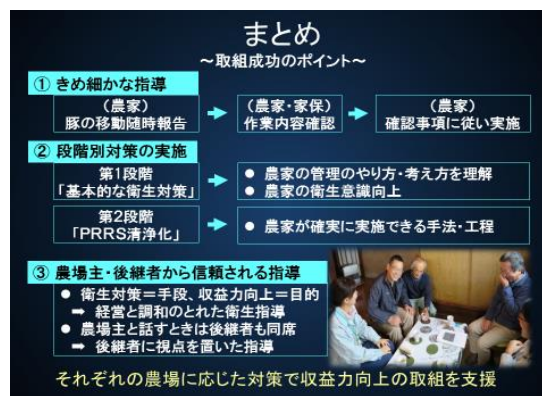


図8 まとめ